

ので残りの爆弾が落とされたともあったそうです。

南方飢餓戦場

山梨県 奥 隆行

私は大正十（一九二一）年三月三十一日、山梨県南都留郡谷村町下谷において出生。昭和十七（一九四二）年四月、早稲田大学商学部三学年に進むと「九月繰上げ卒業、十月一日入営」の発表があり、近衛第一連隊に入隊しました。

江戸城の名残を留める田安門を入ると、中はこんな広い所があったかと思うほど広大で、入って左に将校集会所がある。現在の武道館が建つところである。内務班のことや教練・演習のことは省略する。

入営十カ月もすれば下士官になる幹候を、目の仇にされるようなことはなく、程度の良い近歩一連隊には「幹部候補生だから頑張れ」と気合を入れられはしたが、幹候だからといって特別不当の扱いを受けたことはない。

経理部幹候の試験は難関で「帝国憲法について論ぜよ」「臨時軍事費と財政の関係について論ぜよ」の二題中一題の選択で、私は後者を選択、解答した。

昭和十八年七月一日、甲種幹部候補生として陸軍経理学校に入校した。経理部幹候生の出身校は、東大、東京商大、慶大、早大、地方帝大の順で、幹候になった者も兵科に進めば将校になれる人材ばかりである。

昭和十八年一月二十三日は近歩一の満七十年の軍旗祭の日で、特別食が出て、催し物が盛大に行われた。昭和十八年七月一日、陸軍経理学校入学、第一中隊第一区隊長は、その人ありと知られた及川中尉、通称鬼川中尉で、近衛師団出身者は全員第一中隊に編入された。中隊長は陸大出の西村少佐、指導見習士官に一期先輩の商大出の渡辺見習士官で、六カ月の経理部将校としての教育が始まる。

中隊長、区隊長は兵科将校で、校内の起居動作には極めて厳格、演習も初年兵の時を上回る酷しさである。軍隊経理の学科と軍事教練が隔日に行われたが、そのうちに教練は週二回になり、経理の学科に主力が注がれるようになった。

学科は糧秣、被服等を主題とし金銭経理、兵器、営繕経理など隊付主計将校の養成が主目的であったが、短時間に多方面にわたる授業が多く余り記憶にない。野戦帰りの教官も多かったので野戦における体験談の方が参考になったような気がする。考えてみると軍隊も官庁である。一応決まり切った授業を形どおりに行わなければならなかったのかも知れない。

教科書による授業が修了すると図上戦術といって地図上で戦闘間における大隊付主計の糧秣、弾薬等の補給及び炊事についての指導を受ける。実戦的で、この教科が一番興味があった。卒業間際に教官が「戦闘間は主計は大隊長のそばにいて私的副官のようなことをしている、戦地で主計が一

番苦勞をしたのは糧秣がなくなった時のことである。一日として食べないわけにはゆかない」と。文字通り腹がへっては戦ができないからだ。演習の方も教練から凶上作戦に移ったが、軍隊記号が多く余り興味がわかなかった。

起床六時から午後九時消灯の間、訓練、学科と目まぐるしく無我夢中であった。ようやく昭和十八年十一月二十日卒業、各任地別に見習士官の服装で初めて軍刀をつり校庭に整列する。学校長・迫中将、中隊長、区隊長の訓辞を受け懐かしの校門を後にした。

それから僅か四日して南方総軍転属者は、十一月二十四日宇品に集合を命ぜられ、谷村に帰郷し、二日間家族との団欒を楽しんだ。一日余裕をみて二十二日に上京、母と妹に見送られ東京駅より一路宇品へ向かう。

昭和十八年十一月二十四日、南方総軍に転属の同期生百二十人は全員無事宇品に集合。二十八日

乗船、ただちに出帆、船は昭和十一年建造の三井船舶所属の八、四九〇トン、十九・三ノットの「有馬丸」で船団の前後左右に四隻の駆逐艦の勇姿があり、船団は十隻位と記憶する。船倉のいわゆるカイコ棚の居住区は三畳ぐらいのところは五人ほど押し込まれた。着のみのまま、救命胴衣を枕に横になるわけだが、夜中に便所に行ったりすると横になる隙間もなくなる。煙草の煙と人いきれで、いたたまれず時々甲板に出て深呼吸をするのだが寒くて長居はできない。

沖繩を過ぎる頃からは甲板に出てごろ寝をした。玄界灘を過ぎ沖繩、東シナ海は無事通過、バシー海峡に入ると大荒れの天候となり、その間「潜水艦警報」が発令され、見習士官は交替で対潜監視の任に就く。眼鏡で海面を熟視するのだが暗くて何も見えない。潜望鏡と魚雷の航跡を見て報告するのだが、海軍の兵隊ではなく、見たこともないものがわかるわけがない。

こんな日が幾日続いたであろうか、朝、目が覚

めてみると西側水平線に細長く陸地が見える。マレー半島である。「ここまで来るともう安心ですよ」船員が教えてくれる。埠頭に働く半裸の白、黒、褐色の苦力たちを眺め、初めて見る異国情緒に浸りながらシンガポールに上陸する。内地出帆後十七日目、昭和十八年十二月十四日のことであった。

早速、南方総軍経理部に出頭、着任の申告、森中将が涙を流して我々の到着を祝福して下さった。森中将は経理学校の俊才で第一次欧州大戦時下の「英国戦時財政」の研究で経済学博士の持主として知られた人です。また経理部勤務の先輩将校が、我々の被服の程度の悪さに驚き、新品の兵用の夏衣袴と編上靴を支給、交換してくれた。現地製の任官後に着用できる開襟の上衣、軍袴を心配してくれたことも忘れ難い思い出である。

私は同期生七人と第十九軍司令部付を命ぜられたが「第十九軍司令部はアンボン島アンボンに在

り」という簡単なものであった。「アンボン島とは一体どこなのか」と司令部の大広間に吊るしてある大きな世界地図で探すと、西部ニューギニアのすぐ西にある小さな島である。「これではニューギニアと五十歩百歩だ。えらい所へ飛ばされたものよ」と思った。

早速、船舶司令部に行き、アンボン行船舶の出発予定を尋ねると、ジャワのスラバヤより出帆するので、まずジャワに渡ること。ジャワ行の船は十二月三十一日出帆するので三十日乗船するよう指示を受ける。「諸君が無事アンボンまで着けるかどうか問題だ。ガダルカナルが陥ちニューギニア戦線の激闘に伴い、その補給基地であるアンボンは連日連夜の空襲で、アンボン行の船は八十パーセントは沈められている状況である」と。

乗船の日が近づき宿舎「南溟閣」では餅つきが始まり、我々は餅つきの音をうらめしく聞きながら十二月三十日、豪北、ニューギニア、チモール、ジャワに赴任する一行四十人は輸送船「橘丸」に

乗船した。出航間際に、南方軍総司令部付となった坂本春吉君（京大出）が一人駆け付けてくれ、栈橋の欄干に飛び乗り、抜刀して「棒ゲ刀」の礼で我々を見送ってくれた。

一夜明けるとスマトラのパレンバンに入港。昭和十九年一月一日を、我々は油田の町パレンバンで迎えた。約半日の停泊で翌朝無事ジャワ島ジャカルタに到着、ホテル「デス・インデス」に宿泊する。オランダ政府によって建てられた豪華ホテルである。

停車場司令部に行き聞いたところ、明日正午スラバヤ行きの列車に乗るようにと。ジャワ横断の列車は薪で走る旧式なものだが、一等車は窓がコーティングされたガラスがはまり、外からは内の様子が見えないようになっていた。しかも冷房車である。当時内地には冷房車はなかった。

昭和十九年一月二十二日、乗船命令が下り、アンボンへの七日間の航海と思いきや、なかなか出

帆しない。乗船後三日目に日直士官を命ぜられた。翌日、「白山丸」は静かにスラバヤ栈橋を離れた。毎時八ノットの低速でアンボンには二月二日早朝に着いた。

アンボン島は東経一二八度、南緯四度に位置する小島で、日本の奄美大島より少し大きい。人口は当時五万余、島に日本軍が上陸したのは昭和十七年一月二十一日、陸軍一個連隊、海軍陸戦隊の総勢三千人余であった。アンボン占領後一年後の昭和十八年一月七日、第五師団第四十八師団を隸下に第十九軍が編成された。アンボン人は勤勉で優秀、日本人の性格によく似ており、あと少しで終わりそうな仕事は、やり終わってから休憩するというふうである。

スリーに貨物廠があり、薬剤部の夏目薬剤少尉が蒸留工場を作り、白い幹の葉を蒸留して作る油、白樺の木のようにミニヤ（油）を作っていた。これは現地人にとっては頭が痛いからと言っては頭

に塗り、腹が痛いからと言って腹に塗り、切り傷に塗り、虫除けだと言って身体全体に塗る万能薬である。

今まで貨物廠勤務だったが今度は自分が長となり醸造工場を作るのだが、日本人は私以下、高等官尉官待遇の篠原技師と下士官待遇の嶋技手、渡辺雇員の四人で、外にスラバヤ苦力二十人程である。せめて下士官一人、兵五人は欲しいと本部に要求すると「貨物廠にそんな余分の兵力はない」の一言。それでも兵隊代わりに兵補をつけてくれた。兵補は旧オランダ軍の傭兵で訓練、教育され、日本軍にあつては日本兵の不足を補う要員で使役や衛兵、倉庫番に使用されていた。

篠原技師は阪大醸造科の出で手先が器用で、現地人のブリキ屋を相手に蒸留器を作ったりハンダ付けをした。嶋さんは篠原さんを助け、麹室の建設に懸命、渡辺雇員は篠原さん嶋さんの仕事を黙々と手伝っていた。蒸留、麹室の建設、麹の作成は篠原、嶋に任せ、私は醸造タンクの作成に没

頭する。幅一・五メートル、長さ一〇メートル、深さ一・五メートルの水槽型のコンクリート製モロミタンクを半地下に二本並んだ形に造り、さらに一メートル角に仕切ったタンクとした。

味噌、醤油の仕事は単純で、嶋さんが一人で兵補と苦力を使い作業は順調に進んだ。篠原さんは椰子酒の蒸留にかかり、若干の資材は内地より、足りない部品は自分で作り、蒸留装置が出来上がった。椰子酒は火をつけると青い炎をあげて燃える。夏目少尉のところで再蒸留してアルコールの代用品を作った。

私がスリーに赴任した当時は貨物廠も物資が豊富で、働きに来ている村民にも米や砂糖、石鹼など支給したので、村民もなつき安心して自分達の宿舎にも来るようになった。

私は主計将校として南方第一線にあつて思うことは、日本人はなぜ気候、風土、人情の違う外国に来てまで味噌、醤油と日本食にこだわるのか。

魚を獲ればサシミにして食べたいとか、身のしまったサシミを醤油とワサビをつけて食べるから美味しいのであって、皮ばかり固く水分の多い身のしまらない魚などうまいわけがない。唐揚げにする結構いける。パサパサの米も焼き飯にしたりカレーにしたり椰子の実のコブラの搾り汁で炊いたり、クミン（大黄）を入れたりすれば美味である。

味噌、醤油作りも軌道に乗り、若干暇もできたので椰子油の製造に着手する。スリーは海岸地帯で一面に成熟した椰子の実が落ちていて、「拾っていいか」と聞くと「かまわない」と言うので子供に毎日拾ってこさせ、一斗缶を切って釘で穴を開けて作ったオロシ金でコブラをすりおろし、大鍋で煮詰めて椰子の油製造に着手した。椰子の殻からコブラを取り出すのは大変な仕事だが兵補は簡単にむいていた。

ある日、井上廠長が佐藤部長を連れ、工場視察

に訪れ、短期間に味噌、醤油、椰子油の製造に成功したのみならず、椰子油も大量に作ったので経理部長にお褒めにあずかったのか御機嫌がよかった。自分も若干得意になって、マレー語を使い、兵補苦力を使っているところを見せたのが佐藤少佐の目にとまり、後に佐藤少佐を長とする貨物廠セラム支廠建設の先遣隊に、マレー語の達者な青年将校として先発することとなる。私はスリーにおいて七月一日少尉に任官した。

七月中旬頃と思うが佐藤少佐の訓辞の後、大発（自動車）に乗り込み、敵戦闘機の襲撃を避けながら、夜陰に乘じ対岸のカイライトに上陸する予定で、我々先発隊は佐藤少佐、樋口少尉と私の将校三人、兵隊約五十人ほどであった。カイライトには僅か一時間強の航行で着いた。

翌日から樋口少尉と倉庫建設適地を求めて付近を偵察する。なかなかない。なるべく棧橋の近くに求めるも適当な場所もなく、宿舎近くの遮蔽地としたが、意外に湿地で丸太を幾重にも重ねて搬

入路を作るなど困難を極めた。作業を終え、宿舎でひと寝入りすると、夜半電話で「食糧を積んだ貨物廠の大発が着いたので荷揚げに来るように」と。疲れていたが荷揚げをする。

当時まだ米があつたので米飯で、カイト周辺には住民が少なく、野菜の入手ができず、毎日大根の切干し、カボチャの味噌汁ぐらいで、体力の衰えが自分でもわかるほどであつた。

ある日、佐藤少佐より樋口少尉とともに呼ばれ、出頭したところ、「西部ニューギニアに在る第二軍の貨物廠要員がアンボンまで来たが、戦況悪化により赴任できず、今般、第十九軍貨物廠の指揮下に入るべし、よつて当カイト支廠の業務を彼らに委ね、佐藤隊はセラム島ビルにある本廠に戻る」となる。「奥少尉はアンボン島に至り、高杉少佐を当地に案内、同少佐の指揮を受けよ」ということで、私一人がカイト支廠に残ることとなる。

仮設倉庫の建設と並行して、さらに奥地の山中

のホニテイトの倉庫建設も進み、そこに移る。ホニテイトでの最初の仕事は農場の適地を求めることであつたがなく、あいにくマリアに冒され四〇度の高熱が出る。食欲の減退で苦しんだが、熱が下がり、そうすれば将校はいつまでも休んでいゝるわけにいかない。早速高杉少佐に呼ばれ「奥少尉はワイトバルに至り農場の開拓に当たれ」と。

十一月の初め頃、兵七人、農業指導員の軍属二人、防衛隊より派遣の横山上等兵の指導する兵補三十人が総員で、農場の方は伐採用具の不足と伐採した生木がなかなか燃えないのに苦心した。

原住民の芋はツルが伸び、葉ばかり繁茂し、収量の少ない芋である。海軍農場の芋の栽培を学び、苗を分けて貰い栽培することとする。「沖繩百号」と言う苗の植付けは成功し、それに植え付け時期は遅いが収量もあり、さつま芋より美味のタピオカ芋の植え付けを実施し、五カ月後には自活の目

安がついた。

これでもまだ安心ができないので、サゴ椰子の澱粉を作る計画を立てた。彼らのサゴを採取すると彼らの食料を横取りすることになるので、他の場所のサゴ椰子林を探す。探し当てた所の所有者である中国人村長の同意を得て、早速村民五人程を頼み採取にかかる。どこで聞いて来るのか遠くの集落から野菜と交換してくれとサゴ澱粉をもらいにくる。ニュースの電波の速さに驚く。

本部の糧秣も底をつき、昭和十九年の末頃から米も余り貰えないが、サツマイモやサゴ澱粉のお陰で困るようなことはなかった。

昭和二十年正月に、海軍から餅米の特配を受けたが餅が搗けるわけがなし、原住民の真似をして竹筒に入れ蒸し強飯にして食べたが美味しかった。これが飯らしい飯を食べた最後だと思う。サゴ澱粉、さつま芋、里芋、南瓜、トウモロコシ、タピオカ芋などを主食とし米の生活とはおさらばである。

一カ月に三〜四頭の猪か鹿の肉を食べ、油は椰子油、その間、鳥やコウモリ、なまけものの肉を食べ、川で採った小魚、川蝦を食べていたので脂肪、蛋白質は足りる。

七月中旬頃、今度は本廠のピルに戻るようにとの命令あり、カイライトから原住民の漕ぐ丸木の小舟でピルに行く。本部に行くとは貨物廠の看板はなく池田隊の看板があり、アンボン時代の将校はいなかった。同期の堀君から「日本もいよいよ最後らしいぞ」と話を聞き、数日ぶらぶらしている」と「ルモリ」農場主任の辞令をもらった。

本部から近い農場はサツマとタピオカの畑で、成育上がらず、新たに農地拡大の兵力もなく収穫と補植で手いっぱいである。篠原技師が相変わらず醸造部でソピーを作っているので、そこを訪ねたりのんびり過ごしていた。堀君が訪ねて来て「どうも戦争は終わったらしい。通信隊の将校の話だから間違いないと」のこと。それが八月二十日であつたか記憶がない。

セラム島には無疵の第五師団数万が健在で、むざむざ降伏の必要もないと思つたが「ああこれで助かった。生きて帰れるぞ」との思いが一番先に心に浮かんだ。

終戦後、連合軍の命令で住民との交渉は禁止されたが、彼らが進駐しているでなし、原住民は私達の所へ出入りしていた。ないと言つても貨物廠の倉庫である。石鹼が山のようにあつた。食糧は底をついていたが石鹼は腐る程ある。それも高級のラックスだ。彼らの日当は石鹼だ。野菜、雉、猪など交換と言つて食べ切れないので無償交付する。

セラム島の原住民の食料、食品について簡単に述べると、一番なくて困るものは塩である。海岸端の中国人が海水から煮詰めて作る粗塩を物交して取得し、蛋白質は猪、鹿肉は脂肪が少なくうまくない。クスクス樹の上に住んでいるナマケモノは若干草臭いが、大型の猫位の大きさのものを丸

のまま燻製にして食する。トカゲは雉の肉とそつくり、白くてくせもなく美味であつた。ブルーン・タウンは雉の倍位の大きさと肉はあまりおいしくない。

川魚は原住民は竹製梁で小魚を採る。鰻は腕の太さ位もあり、五尺を超えるものもある。錦蛇は焼いて食べ、海岸近くの原住民は亀をとり、たまに鮫を食する。タピオカ、サツマ、里芋、椰子から澱粉を、砂糖椰子から黒色水飴状の甘味、油もコプラから、タピオカ芋は内地で見ることのできない木の根が芋という不思議な芋で、桑の枝のように一本すーつと伸びた幹を一尺位の長さに切つて土にさしておくとも根が出て芋になる。味は粟のようで美味、収穫しなければその分土中で大きくなる。さつま芋は南方原産で、年がら年中栽培出来るカスピの葉は、日干してお茶として飲んでいい。

原住民は芋をふかす時、竹を一節切つて来て洗つた芋を入れ葉で蓋をして火に立て掛け、竹を廻

しながら火を燃やす。竹の水分で芋がふける、おいしい。

川原に近い砂地では落花生も良くできた。原住民はなぜか胡瓜、ウリは作っていたようで、また葉菜類も作っていない。さつま芋の葉、自生の春菊、湿地を好むカンコン、椰子の若芽、食べられる木の若葉を食べていた。

バナナが主食のように思えた。海岸の原住民などコーヒー一杯にバナナ二、三本で朝食にしている。種類が多く、おいしくないバナナは、皮をむき縦に薄く切って唐揚げにすると、煎餅のようにパリパリして生で食べるより美味である。

野生のパイヤもあつたが、ハヤトウリ位の大きさにしかならず葉を茹でて汁を飲み、葉を食べ、マラリアの薬だと言っていた。非常に苦いらしく顔をしかめて飲んだり食べたりしていた。キニーネのような成分が含まれているのかも知れない。

現地の茄子は白緑色で、大型で皮は固く、余り

美味しくなかった。冬がないので枯れず育つので、二メートル以上ある木のように、日本種の茄子がおいしいと。

以上、南方離島における現地自活の状況と、現地の食料事情を簡単に述べたが、敵が上陸して一度戦闘状況に入ればたちまち食糧難で自滅のほかない状態であつた。

アンボン上陸以来一度も内地からの便りなく、また内地に手紙を出す術もなく、離島における敗戦は、玉碎しかない戦況を兵隊は知っていた。がそこにはギスギスした空気はなく、朗らかで、明るく、いつもいつも話し合っていた。悪人はいない、善人ばかり、私は本当に誰も死なせないで内地に連れて帰りたいと幾度も思った。